

御幸町だより

No.147 2022年3月27日

京都御幸町教会

〒604-0933

京都市中京区御幸町二条下る
山本町434

TEL・FAX (075) 231-3441

『ケリト川のほとり』

牧師 村島 義也

平安時代中期の人物、藤原実方（中将実方朝臣とも称す）をご存じだろうか。中古三十六歌仙の一人にして、源氏物語における光源氏のモデルとも目される人物。当然、「小倉百人一首」にも彼の句が遺る。ところで、かような人物の墓はいずこに。

それは東北、私の前任地、仙台に程近い名取市郊外の鄙びた所にある。かつて「笠島」、今は「愛島」の地名である。畑の間の道に入り両脇に竹林を見ながら辿った奥に杉林に囲まれたその場所がある。狭い所である。今では史跡として整備され案内板が設けられ、墓の四隅を石柱が囲う形だが、墓そのものは高さ30センチ程の盛土が名残りを留めるばかり。昔はそこに立派な五輪塔が建っていたと伝わる。側に西行法師と松尾芭蕉の句碑が建つ。西行法師は1186年秋（文知2年）に墓を詣で一句手向けた、「朽ちもせぬ其の名ばかりを留めおきて、枯野のすすきかたみにぞ見る」。芭蕉は奥の細道紀行の折、悪天に阻まれ実方の墓に至れなかった悔いをこゝに残した、「笠島はいずこ五月のぬかり道」。

伝わる実方の物語はこうである。〈都で人気を博す頃、花見の際のパフォーマンスを伴う一句が風流と評判になった。しかし同じ年の頃の藤原行成が「歌は面白し、実方はをこ（馬鹿）なり」と笑ったと聞いた実方は、殿中出合い頭に行成の冠を取り庭へ投げ捨て立ち去った。たまたまこれを目撃した一条天皇の「歌枕見てまいれ」の言葉の下、実方は陸奥守に任じられ東北に赴いた。左遷である。ただ、実方は任務の傍ら「歌枕見てまいれ」の勅命を心に東北各地の名所旧跡を訪ねつつ年月を過ごした。さて、任期4年目に入り、都の人たちから帰還を待たれる頃のことである。名所巡りの帰り道、実方が笠島道祖神社前を騎乗にて過ごそうとすると、地の人が呼びかけた、「この神は効験無

双の霊神、賞罰明らかなり、下馬して再拝して過ぎ給え」。しかし実方は「下品の女神にや、下馬に及ばず」と応じ進んだところ、馬が暴れ倒れた。この落馬の怪我により実方は病む身となり、間もなく「みちのくの阿古耶の松をたずね得て身は朽ち人となるぞ悲しき」の句を遺し没す。

すべて自らの不遜が招いたことだが、どこか無邪気で憎めない。仙台在住時、私はこの人が可哀そうで仕方なくなり幾度かその墓を訪れた。しかし今にして思えば、自己憐憫に浸るのに恰好の場所であったということだろう。実方の死とその朽ちた墓に我が身を重ねていた。その頃、私は徒に過ぎるばかりの療養の日々に、落人の隠れ里に住まう心境であった。後で、思った以上に多くの方が私のために祈っていて下さったことを知った。時は徒に過ぎたのではなく、祈りに包まれた日々であったのだと今は思う。

かつて預言者エリヤは、主の命によりケリト川のほとりに身を隠し孤独の日々を送った。その時期、彼は不思議にも鳥（からす）の養いに命を繋いだ（列王上17:1ff）。私が挫折・療養の陰にあった時期、住いは広瀬川の近くであったが、そこは私にとっての「ケリト川のほとり」だったと思う。実は、祈りに包まれ不思議にも守られながら、霊の養いを受ける日々であった。

京へ赴く前、もう一度、かの人の墓を訪れた。心の中で「都へご一緒しますか」と呟いた。余計なお世話というものであろう。実方には〈雀となって都に帰り、清涼殿の台盤に舞い降りて飯をついばんだ〉という伝説がある。その雀を弔う塚が、左京区の更雀寺にある。心なしか京の雀は宮城の雀より人に親しげで、太って見える。